

山形大学附属博物館のクラウドファンディングについて

はじめに

山形大学附属博物館(以下「当館」)は、山形師範学校の郷土室から資料を引き継ぎ、地学・生物・歴史・民俗・美術などの自然科学、人文科学双方の資料約3万5千点を収集保存展示している。

平成27年(2015)に小白川図書館3階から人文社会科学部(当時、人文学部)1階に移転し、学内外合わせ、年間で約1万人の来館者を迎えている。

結髪土偶は寒河江市石田遺跡出土の縄文晩期の土偶である。大正時代末、左沢線の線路敷工事中に大量の遺物が発見され、当該土偶もこの時発掘されたと考えられる。上半身と左脚は最初寒河江の大地主であった安達家が所蔵していたが、後に上半身は当館前身の山形師範学校郷土室に収蔵されることとなる。左脚は長らく安達家に残り平成に入り寒河江市に寄贈された。

左脚との再会が実現してからすぐに結髪土偶を立てさせてあげたいということで館内はまとまった。ここでは、その後の資金収集の方法の決定やクラウドファンディング(以下「CF」)の準備、実行がどのように行われたかを紹介する。

これまでの運営資金

当館の年度予算(平成30年度)は828万3千円であった(表1)。大学運営資金(業務費)のほとんどが博物館管理経費や光熱水費であり、左脚接合に係る修復費は博物館経費での対応が困難であるため、外部資金による修復を選択した。

当館には寄付を受けるための「山形大学附属博物館振興募金」がある。これは平成28年(2016)より博物館の運営や収蔵資料の修復を目的とし始まった取り組みで、博物館受け付けに募金箱を設置し、大学の奨学寄附金として受入れている。ありがたいことに年間で数万円が集まるがこれまでの繰越金でも左脚の修復には難しい金額であった。その他、大学が受け付けている寄付金「山形大学基金」もあったが、金額と用途からCFの方がよいのではないかと大学基金担当者から助言もありCFによる資金獲得に決定した。

費目	予算額(円)
印刷費	130,000
負担金	13,500
資料購入経費	10,000
資料整理賃金	111,000
展示会経費	300,000
博物館管理経費	5,670,000
資料補修費	13,000

費目	予算額(円)
消耗品費	124,500
国大博協議会旅費	115,000
設備充実費	16,000
雑役務費	400,000
光熱水料	1,380,000
合計	8,283,000

表1

CF実施までの流れ

山形大学では平成29年(2017)に理学部栗山恭直教授がCF「山形大学発!サイエンスショーで被災地の子どもたちへ笑顔を!」(READYFOR(以下RF))を成功させていた。このときCFに係る要項などが定められたため、内部での必要な手続きは本学の規定に沿って進められた。

始めに、プロジェクト概要等を記した「クラウドファンディング事業実施計画書」を担当部局へ提出、その後承認されて決定通知書が出された。

続いて、CFの運営会社との契約だが、当館では山形サポートを通してRFと契約した。山形サポートは山形新聞、荘内銀行、山形銀行、きらやか銀行、山形県、RFがCFを支援するための組織であり、運営主体は山形新聞である。他にもCFの運営会社はあるが、山形新聞に載ることの発信力や栗山教授のプロジェクトでの前例があったため、RFを選択した。

山形サポートHPから資金募集の申し込みを行うと、その後RFフルサポートセンターから申し込み内容についての確認がある。ここで内容と金額、実行したときの発信力など無理のない計画かどうか審査される。

審査後、担当者との打合せが行われた。今回、1プロジェクトに1名が伴走してサポートするフルサポートを選択した。手数料は20%だが広報についての助言や細かな指導を受けられたため大変助けになった。その後、数回の打合せでプロジェクトの内容、金額、スケジュールを決定し、契約書を交わした。

募集のスタート日は一度に多くのメディアに広報できる学長定例記者会見に合わせて7月22日に決定した。募集期間は目標金額によって妥当な日数があり、多額だからといって期間を長くすればその間担当者が疲労するというので、RFと相談の上8月から9月の「博物館実習夏季集中講座」を避けて9月20日終了の61日間とした。

スタートから達成まで

CFは主にインターネットを通して事業の内容に賛同を得た不特定多数の支援者から寄付を募る仕組みである。購入型と寄附型の二種類があり、購入型はモノやサービス、体験や利権などのリターンを販売し、支援者はそれを得られる。寄附型はリターンに対価性のないものに限り設定できる。実施方式には、期間中支援金額が目標額に達したときのみプロジェクト成立となり資金を受け取れる all or nothing と目標金額に到達したかどうかに関わらず受け取れる all in 方式がある。当館では、税制優遇がある寄附型のほうが元々行っている募金箱とも仕組みは同じであり、また対価性のあるグッズが無いということで寄附型となった。All or nothing 方式は期間中に目標額が集められなければ一円も受け取れないため、ゲーム性の高い方式だが、それだけに資金の集まり具合に注目を集めやすくうまくいけば話題になる方法である。

寄付は令和元年7月22日の12時にスタートした。最初の寄付は当館の学芸研究員からで、プロジェクトの発足から経緯を知っている方からの支援は大きな励みとなった。その後7月25日の学長定例記者会見にて「山形大学CF第2弾～90年ぶりに再会した左脚を接合し結髪土偶を立ち上がらせたい!～」を発表した。

CFは最初の5日間で目標額の20%を達成できるかがプロジェクト成功の指標となるが、これが簡単でないことは今回よくわかった。事前の打ち合わせでも担当者からRFのサイトや山形サポートに載せただけで寄付がすぐ集まるものではなく、情報発信は実行者が主体であり、資金調達の面では実は手間が多いとのこと言われた。実際、インターネットを通じた寄付も途中で停滞し、個別に直接対面しての営業活動の成果が中期以降から増えていった。館長を中心に村山地域の郷土史研究会の会員など各地の郷土史研究家に手紙を出し、寄付をお願いした。手紙を受け取った方は直接寄付を届けてくださることが多く、対面での応援は大変励みになった。

また、地元銀行からの紹介で寄付につながった企業や、興味がありそうな方への地道な声掛けが功を奏し、目標達成への大きな助力となった。

RFではインターネット及びRF銀行口座振り込み以外に手渡し、銀行口座振り込みからの代理支援が認められている。一旦支援者から支援金を当館がお預かりし、それをプロジェクトのアカウントから入金する方法である。これはプロジェクトページ上では当館が支援したように見えるため、必ず支援者の名前を出しどこからの支援であるかを明記する必要がある。本プロジェクトでは、このような代理支援での支援者は全体の約37%であった。

目標額である160万円は9月4日に達成した。その後、RFよりネクストゴールの設定について打診があり、次の目標額を200万円とし、両脚復元予想レプリカの作製とWEB教材の作成を追加した。All or Nothing方式は目標額に到達すると、その安心感から寄付者が増える場合がある。当館も達成したことで山形サポートのSNSで紹介され、プロジェクトページへの訪問者数も増えたことで最終的には目標額より109万5千円多い269万5千円で終了した。寄付者人数は166名、達成率は168%であった。

リターンの内訳

寄附型のプロジェクトのリターンには値段がついたものを用意することはできない。そのため、平成27年のリニューアルオープンに合わせて、博物館PR用に作った手ぬぐいとTシャツの在庫をリターンに選んだ。他のミュージアムではポストカードや葉、招待券、図録、現地解説会など特徴的なリターンを準備しているが、当館では人員が4名と少ないため



RFトップページ

ターンに労力をかけることができず、なるべく品数を増やさない方法でリターンを組んだ。しかし、土偶ファンに向けてのアピールも欲しかったため、結髪土偶の頭部を作る土偶作り体験とレプリカを用意した。

結髪土偶作り体験と結髪土偶レプリカ、報告書以外のリターンは、寄附金領収書が出るのに合わせて令和元年(2019)12月に発送した。結髪土偶作り体験は11月24日に開催した。講師の菊地逸夫氏(縄文工房)より土偶についての講義を受け、その後実際に粘土を手にとって結髪土偶の頭部を制作した。日程が合わずに参加できなかった方々へは代替りの品として手



参加者の作品

ぬぐいと結髪土偶頭部の試作品をお送りした。結髪土偶レプリカは土偶作り体験講師の菊地氏に制作を依頼、結髪土偶が修復から戻るのがに合わせて作品の調整を行い、乾燥・焼成後令和2年(2020)12月上旬に順次発送した。

広報活動あれこれ

・ポスター・チラシ

館内にてポスター・チラシを作成した。チラシは主に県内諸機関、個人の他県外の考古学系博物館に発送した。また、近隣の考古学系博物館へは直接ポスター・チラシを持参し趣旨説明などを行うなどの広報活動を行った。

・SNS

当館 Facebook アカウントでは7月19日に事前告知の記事を出した。リーチが約1000件に達しているため、たくさんの方に見てもらえたことがわかる。同じく当館のTwitterでも投稿を行った。こちらでは各メディアのCFに関する投稿を積極的にリツイートし、記事にコメントを書いた投稿にリツイート・ハート(いいね)で反応し広報に努めた。SNSでの拡散にはインフルエンサーとよばれる世間に影響力のある人物からの情報発信が有力になる。実際、縄文ZINEのTwitterに紹介された日の訪問者はスタート時、達成時の次に多く、連鎖的に興味を持った人がアクセスしたことがわかる。

・RFプロジェクトページ

当館では大学の夏季休業に合わせて8月10日～18日まで休館していたが、プロジェクトが動いていることをPRするため、プロジェクトページの新着情報で「館員が訪ねた博物館シリーズ」を発信した。

・コメント

RFのページから支援を行うと寄付者から実行者にコメントを送ることができる。何もな

ければ定型文が送られることになるが、たくさんの方から応援のコメントをいただいた。この応援コメントには24時間以内に返信することを心がけ、感謝の気持ちを伝えた。

その他、山形新聞でのCF進捗情報掲載や『YUM!山形大学マガジン』（令和元年7月22日）、『市報さがえ』（令和元年9月5日発行）で情報発信ができた。また、公益財団法人山形県埋蔵文化財センターのHPや山形大学生協のTwitterなどで情報拡散にご協力いただいた。

修復後

修復を終えた結髪土偶は9月1日に当館へ戻り、学長定例記者会見にて立ち上がった姿を発表した。しかし、令和元年末からの世界的な新型コロナウイルス感染症の影響で大学も学内施設の利用制限が行われ、当館も9月末まで休館することとなった。10月からは制限のレベルが下がったことで再開したが、事前予約制とし入館前に氏名と連絡先の提出をお願いした。11月からは事前予約なしでの入館に切り替えたが、氏名と連絡先の提出は継続した。

修復後の展示再開は、新型コロナウイルス感染症対策のため入館者数の制限や臨時休館などがあり、来館者の見学へのハードルが高くなってしまった。今後も大学施設の外部利用に制限がかかることを考慮し、インターネット上でのデジタルミュージアムや他施設への貸出など、皆様に立ち上がった結髪土偶を見て頂けるよう活動していきたい。

(押野 美雪)